第9回 JSPS-LEADSNET 事業研究者交流会 開催報告



令和 8(2026)年 3 月 16 日(月)、ステーションコンファレンス東京において、「第 9 回 JSPS-LEADSNET 事業研究者交流会」を対面とオンラインのハイブリッド形式で開催しました。

本交流会は、海外での研究活動を予定している研究者や海外経験を有する研究者等が、所属機関や専門分野の枠を超えて交流し、今後の研究活動や国際的なネットワークの形成につなげることを目的として開催したものです。当日は、対面及びオンラインにより、合計 86 名の研究者が参加しました。

交流会では、九州大学大学院理学研究院の佐竹暁子教授による講演をはじめ、参加者が自身の研究内容や今後の研究計画について短時間で紹介するエレベーターピッチを実施しました。その後、渡航先地域別及び研究分野別のグループに分かれ、海外での研究活動や国際共同研究に関する経験、現地での研究生活における課題、今後のキャリア形成など、さまざまなテーマについて意見交換を行いました。

また、交流会終了後には希望者を対象としたネットワーキング懇談会を開催し、参加者同士がさらに交流を深めました。

今後もJSPS-LEADSNET事業を通じて、海外で活躍する研究者及びこれから海外へ飛び立つ研究者の交流を促進し、研究分野や所属機関を超えたネットワークの形成を支援してまいります。

【グループディスカッションであがった話題のご紹介】

〇海外での研究活動および国際共同研究の進め方について

・国際共同研究を進めるうえで、研究テーマそのものの適合性に加えて、受入・相手方研究者との問題意識の共有、研究上の役割分担の明確化、相互の強みの理解が重要。
・研究の開始にあたっては、国際会議や既存の共同研究、学会等で知り合った研究者との繋がりを基盤としながら、具体的な研究課題をすり合わせる必要がある。
・各地域の制度や研究環境、研究対象の特性を踏まえながら、多様な地域との協議を通じて研究を発展させていくべき。

〇現地の研究環境、日本の研究文化との違いについて

・日本の研究者は、研究者自らが手を動かし、研究（実験や観察、記録を含め）を進めることが強みであるが、一方で、海外では分業体制が一般的な場合があり、研究者が全ての工程を担うとは限らない。
・研究成果の議論の場では、明確な説明が求められ、より強く主張することを求められている。どのようなときも自分の意見をきちんと述べるというのが何より基本。
・派遣先によっては、日本から研究費等を持ってくるのであれば、自由に研究していいといわれる国もある。現地の自由な研究環境になじんだ後に帰国すると、日本では事務等の庶務も多く働き方の違いを感じる。

〇海外とのネットワーク形成・維持について

・学会や研究会、過去の共同研究や人脈を通じて形成された関係が、後々国際的な共同研究に発展することがある。
・ネットワークは、形成するだけではなく、継続的に維持し続けることが重要であり、定期的な連絡や研究以外の交流も含めた関係構築が、長期的な信頼関係や将来的な研究拠点形成に繋がる。
・現地研究者や日本人研究者コミュニティとの繋がりも、研究活動のみならず生活面での支えとして重要である。

〇海外での長期生活全般、現地生活情報、家族の帯同などについて

・米国や欧州では、日本とは異なる病院制度（かかりつけ医制度）に困った。かかりつけ医の予約も困難であるため、罹患しないように予防することが重要。
・欧州に行く場合は、英語だけではなく現地の言語でコミュニケーションが取れた方が良い。研究者同士は英語で交流できるが、ちょっとした雑談や街の人との会話では、必ず現地の言語のほうが好印象となる。
・渡航先で現地になれるために日本人以外と仲良くなろうとすることもいいが、現地で先に生活している日本人とまずは仲良くなって、生活の知恵等をもらうのがいい。

〇帰国後のキャリア形成について

・欧州では就職口に現地の人も困っている場合がある。米国はより良い職場を求める分、

常に人が流動的なため、ポストがあるといえばあるが、結果が伴わないと状況が厳しくなるのは事実。

〇物価高騰、為替変動の影響について

・円安や物価高騰により、海外での研究費や生活費の負担が増加している。
・現状に応じた支給額の増額を期待したい。

〇国際制度・ルールに関する課題について

・海外で研究を進めるにあたり、試料・データの取扱い、知的財産、オーサーシップ、法令順守等に係る調整が不可欠である。生物資源や伝統知識の利用に関しては、国際的な枠組みがあるが、各国における国内法整備や実務運用が不十分な場合があり、研究者自身が現地機関や関係者と慎重に確認しながら進める必要がある。
・研究倫理やデータ管理等に関しても、国や地域ごとに制度・基準が異なるため、研究開始前に十分に確認する必要がある。

※これらの意見は交流会出席者の個人の意見に基づくものであり、独立行政法人日本学術振興会を代表するものではありません。また、同趣旨と考えられる意見をまとめ、言い換えや補足を行った箇所があります。



九州大学大学院理学研究院
佐竹暁子教授



グループディスカッションの様子